

三浦幸平メモリアルホール

ベーゼンドルファー インペリアル 290 ※1 修理記録  
2011/5/30～2011/9/27



1991 に納品されておよそ20年。  
調律が限界となり、初めてのオーバーホールを行いました。  
非常に興味深い修理の内容を記録しましたのでここに御紹介致します。



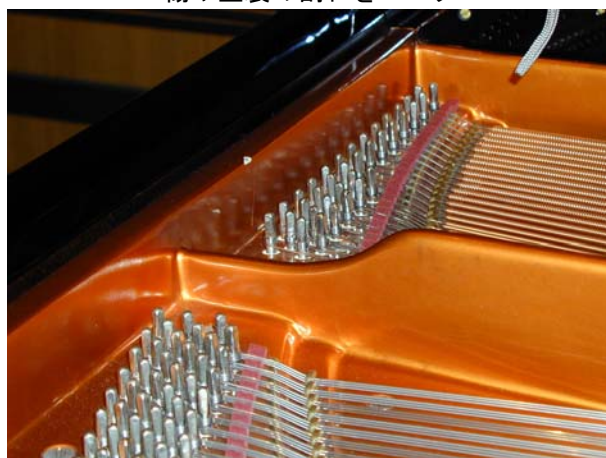
5/30 搬出作業 外観のチェック



傷や塗装の割れをマーク



製造番号確認 #560



弦も全部交換



搬出の準備



脚を外します



毛布で包みます



人力で舞台から降ろします (約 570 k g)



荷台に固定



以上、搬出作業終了

以降、ヤマハ掛川工場にて作業



6/1 工場搬入



6/16 ダンパーを外し、解体準備

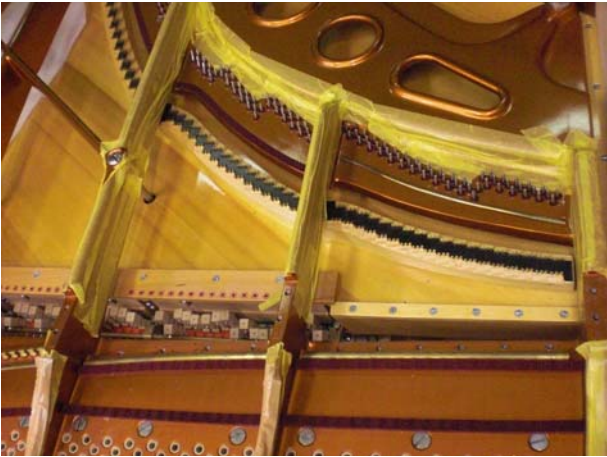




6/16 解体 (中音部)



解体 フレームを傷付けない様に養生をして弦を外す



6/17 解体終了 弦・チューニングピンを外す



6/23 フレームボルトバフ磨き



6/23 中・高音部の芯線玉作り



6/24 アグラフ交換



6/24 芯線玉作り終了

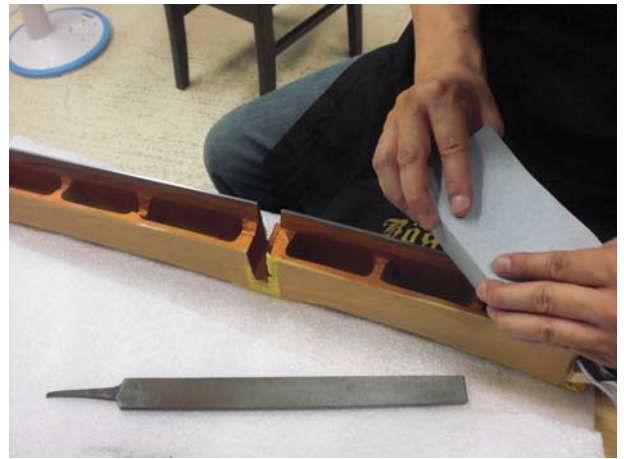


6/24 アグラフ交換終了 低～中音までを交換





6/24 弦枕交換



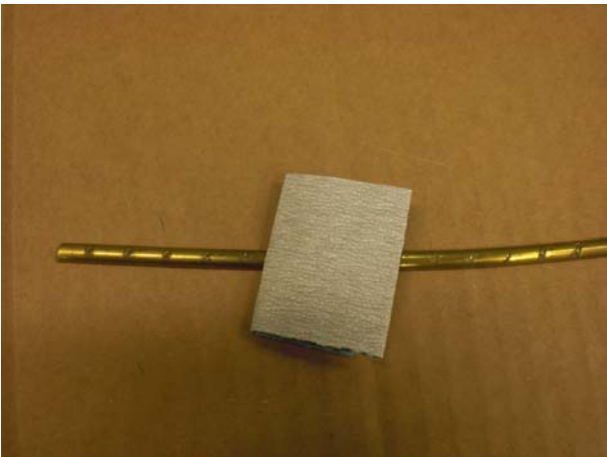
6/24 カポダスター研磨



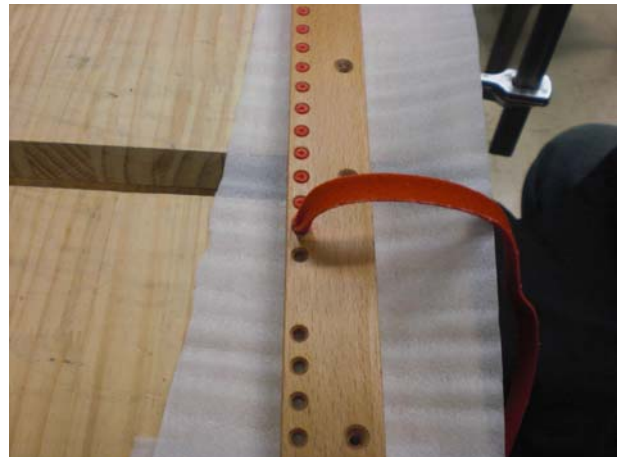
6/24 弦枕・ヒッチピンクロス交換



6/27 弦枕・ヒッチピンクロス交換



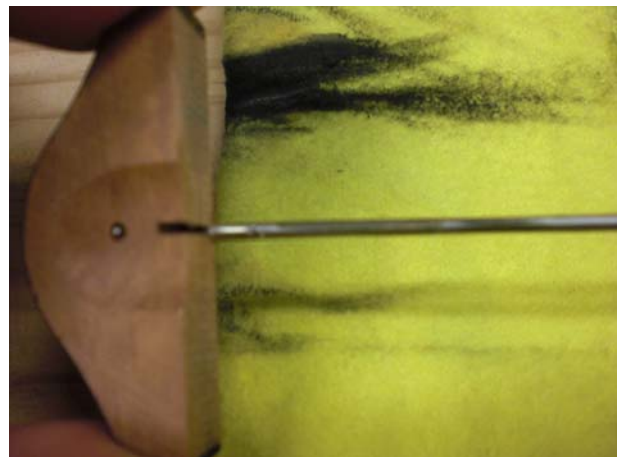
6/27 弦枕(真鍮)磨き



6/30 ダンパーガイドフェルト交換

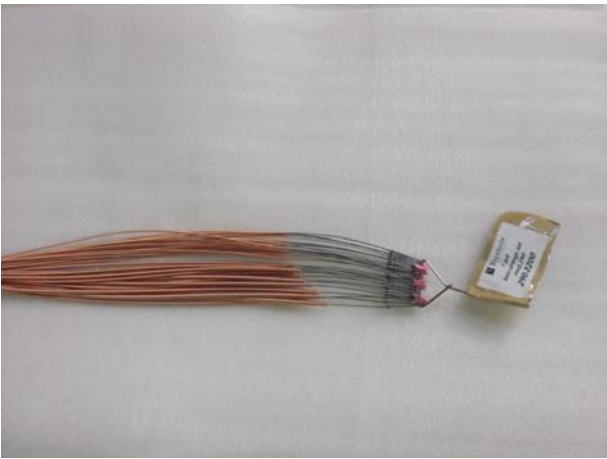


7/6 ダンパーフェルト剥がし



7/6 ダンパーワイヤー磨き





ウィーン ベーゼンドルファー ベース弦



7/7 ベース弦 張弦



7/7 高音部 張弦



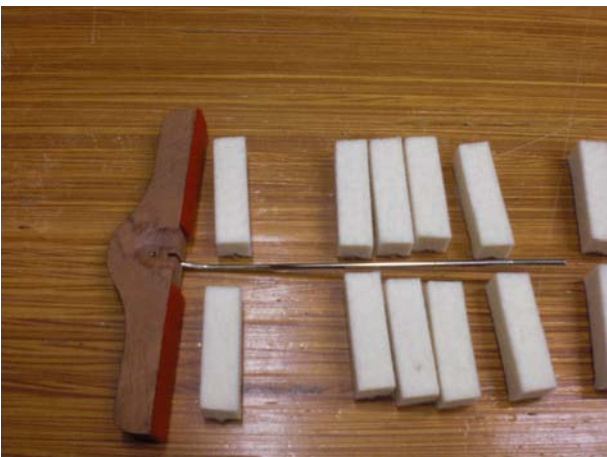
7/7 ダンパーライニングフェルト貼り



7/11 チューニングピン打ち下ろし



7/11 ダンパーフェルト裁断



7/11 ダンパーフェルト接着



7/11 コイル打ち下ろし





ウィーン・ベーゼンドルファー社より  
平ダンパーフェルト アンダー付き



7/11 平ダンパーフェルト接着



7/12 ピッチ上げ  
張弦後、音を何度も時間を掛けて上げる



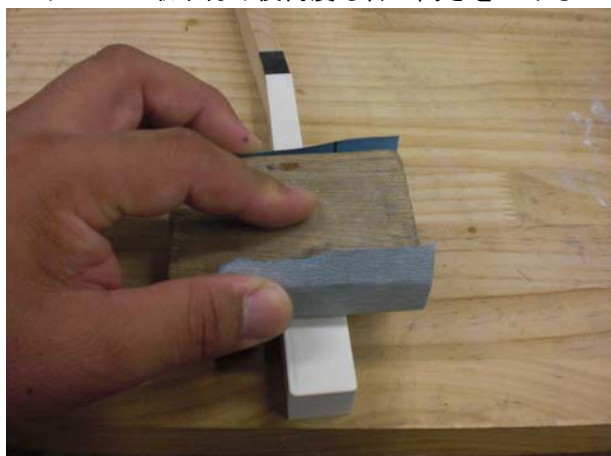
7/14 ダンパー植え ダンパーを本体に取り付け



7/19 ピッチ上げ  
ダンパー取り付け後何度も音の高さを上げる



7/20 象牙鍵盤 磨き

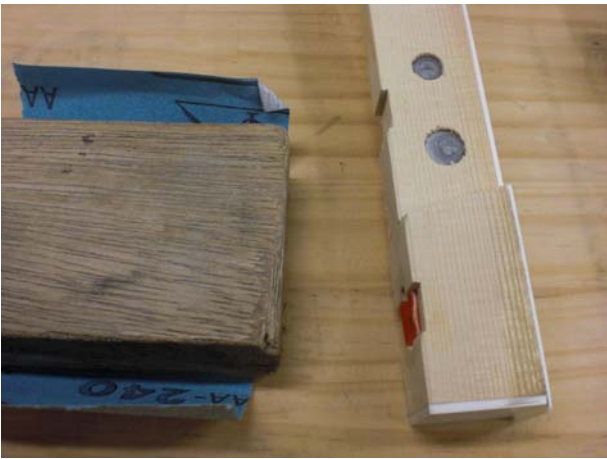


7/20 象牙鍵盤 磨き・ペーパー掛け



7/20 鍵盤バフ掛け





7/20 鍵盤サイド汚れ落とし



7/21 鍵盤バランスホールブッシング剥がし



7/21 鍵盤フロントブッシング剥がし



7/21 鍵盤フロントブッシング貼り



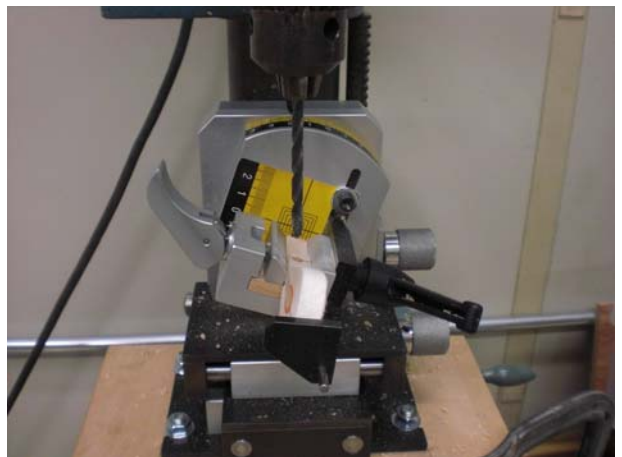
7/27 鍵盤バランスブッシング貼り



8/11 棚から弦下までの距離を測定



8/11 ハンマー穴明け位置出し

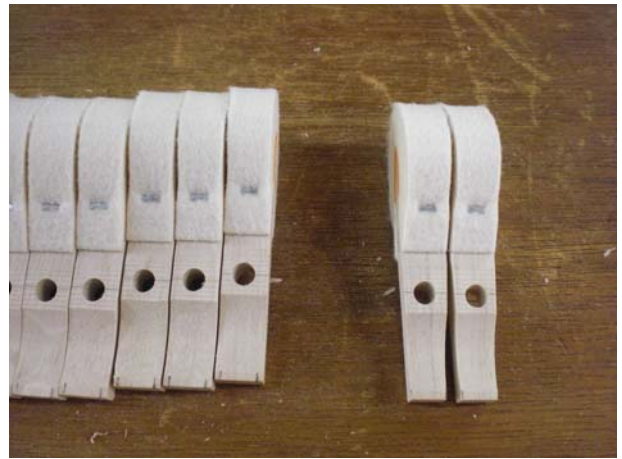


8/11 ハンマー穴明け





8/11 ハンマーサイド加工



8/11 鍵盤サイド加工



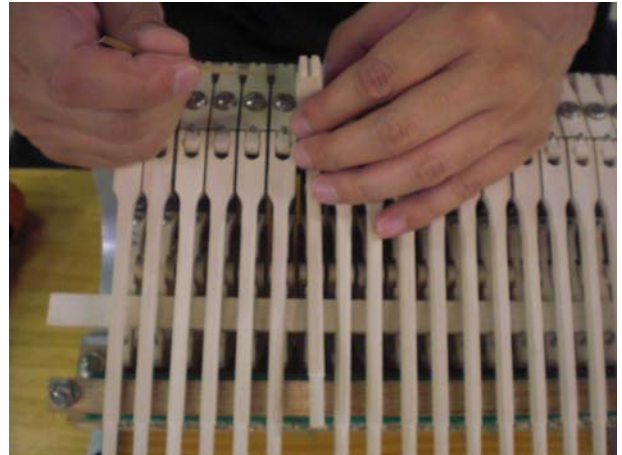
8/12 レギュレーティングボタンブッシング剥がし



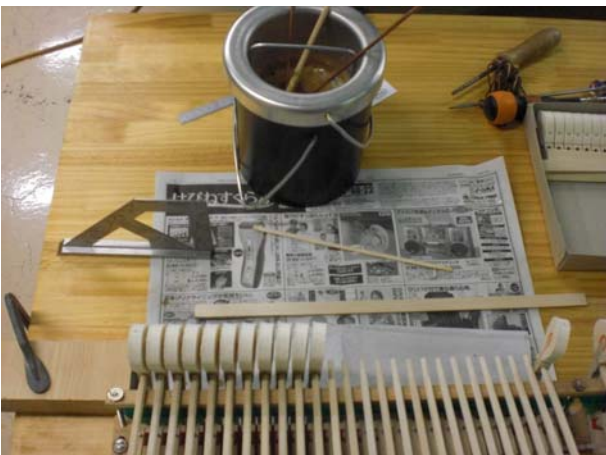
8/12 レギュレーティングボタンブッシング交換



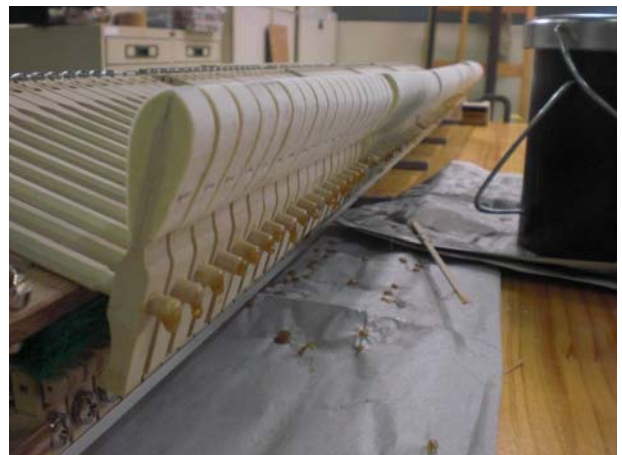
8/12 ハンマーシャンク交換



8/23 ハンマーシャンク走りとり  
ハンマーフェルトを植える前にハンマーシャンクの走りを真直ぐ上がる様に整える



8/24 ハンマー植え  
ハンマーをハンマーシャンクにニカワで接着



8/25 ハンマー植え終了





8/26 ハンマーテール加工



8/26 ハンマーテール加工



8/26 ハンマーテール全体加工



8/31 大屋根外装磨き



8/31 左腕木外装修理



9/1 試弾機

アクションの据わりと、交換した弦を落ち着かせる為  
10時間の弾きこみ



9/2 調整 整音前の細かい調整



9/8 大屋根外装修理





9/8 大屋根修理後



9/8 前屋根外装修理



9/12 第一整音  
ハンマーフェルトに針を入れて弾力をつける



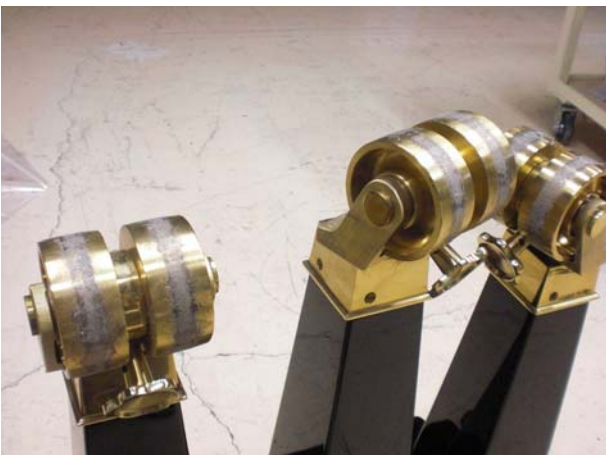
9/12 ファイリング 針をハンマーフェルト全体に入れた後、一皮フェルトを剥く



9/12 三弦合わせ  
ハンマーフェルトと弦がしっかり当たるように調整



9/12 試弾機 6時間の弾きこみ



9/13 キャスター磨き 前後





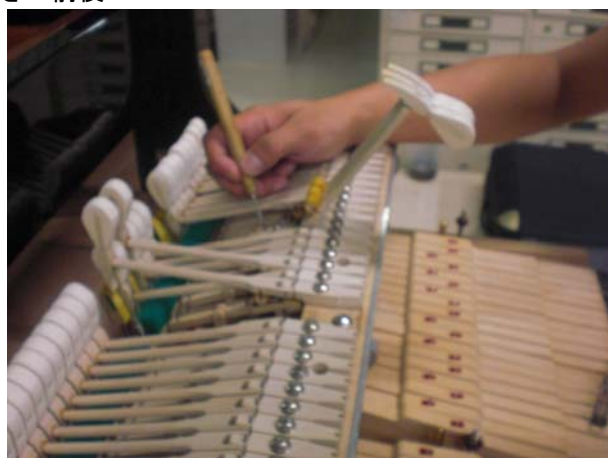
9/13 鍵盤蓋 フェルト交換



9/13 ペダル磨き 前後



9/15 鍵盤蓋クロス貼り



9/21 調整



9/21 鉛を詰めて鍵盤の重さを調整



9/26 最終調整 調律





9/27 ホール納品 脚の取り付け



水平に寝かす



試弾



調律・検収



スコダ氏のサインは健在です ※2  
(Paul Badura-Skoda)

約4ヶ月もの間、修理の為にお待ち戴きましたが新品同様になって戻って来ました。  
弾く事により音が育ちます



これからのキャンパスコンサートや演奏会にて 音の変化や成長をお楽しみ下さい



2011/10/10

## 本文注記



### ※1

ベーゼンドルファーの象徴的存在であるモデル 290 インペリアルは、最低音を長6度低いCまで、9鍵拡張しています。イタリアの作曲家でピアニストでもあったブゾーニの要望によるもので、8オクターブの音域は、ハルトーク、ドビュッシー、ラヴェルなど、彼らが意図した響きを忠実に再現することを可能にしました。響板材として最適とされる木材をボディに使用することで、ベーゼンドルファー特有の、オーケストラを思わせる色彩豊かな力強い音色を醸し出します。アーティストと聴衆の心を動かす深淵な響き。フラッグシップモデル、モデル 290 インペリアルは、世界中の皆様との忘れ難い価値ある時間を共有し続けています。

[97鍵盤]奥行き:290cm 間口:168cm 重量:570kg  
<http://boesendorfer.jp/products/standard/model290.html> より引用

### ※2

パウル・バドゥラ＝スコダ (Paul Badura-Skoda, 1927年10月6日 ウィーン - ) はオーストリアのピアニスト・音楽学者。イェルク・デームスやフリードリヒ・ゲルダとともに、いわゆる「ウィーン三羽鳥」のひとり。

ウィーン音楽院に学び、1947年にオーストリア音楽コンクールに優勝し、その結果エトヴィン・フィッシャーの薫陶を受ける。1949年にヴィルヘルム・フルトヴェングラーやヘルベルト・フォン・カラヤンらといった著名な指揮者と共演する。1950年代には、米国と日本を訪れた。

録音数は膨大で、200点以上に達するが、ウィーン古典派、とりわけモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトの専門家である。自筆譜や歴史的楽器の蒐集家としても有名。エヴァ夫人ともども碩学をもって名高く、揃って『新モーツァルト全集』において、ピアノ協奏曲第17番、第18番、第19番の校訂者を務めた。

1976年、オーストリア政府よりオーストリア科学芸術功労賞を授与。また、マンハイム大学より名誉教授の称号を授与されている。

<http://ja.wikipedia.org/> より引用